●座談会●

なでしこ戦略

――女子大学の活性化に向けて――

堀　雅　裕●跡見学園常務理事・法人事務局長

斎藤宏充●同志社女子大学総務部長

井原　徹●実践女子学園理事長

金子　博●恵泉女学園法人本部事務局長（理事）・大学事務局長

司会

兼高聖雄●日本大学教授
本連盟広報・情報部門会議（大学時報）委員

――敬称略・大学名ABC順――

環境変化の著しい女子大学の現状と課題

兼高　本日は女子大学の活性化をテーマに、男性の方をお招きしての座談会です（笑）。まさにサッカーの女子日本代表「なでしこジャパン」の佐々木則夫監督のごとく、女子大学の名監督、名コーチたる皆さんに、現在の女子大学の状況、その意義、さらには女子大学ならではの教育のあり方など、貴重なご意見、ご提言をいただきたいと考えています。

ちなみに、この中で唯一私だけが女子大学に属していませんが、そんな私も、最初に教鞭を執ったのは、福島女子短期大学（現・福島学院短期大学）でした。さらに十五年ほど前から、フェリス女学院大学でも教壇に立っていますから、十分に司会の任に堪えると思いますので、よろしくお願いします。

社会を見回してみますと、男女共同参画も世の中に浸透してきましたし、女子学生の数も増加し続けています。同時に、女子大学という概念自体がもはや古いのではないか、歴史的な役割を終え、存在意義も失

（2012年3月30日　アルカディア市ヶ谷「雲取」にて）

われたのではないかといった議論があることも事実です。そして、女子大学の「女子」の字を外して、共学大学として生まれ変わるケースも増えています。

このような実態を踏まえて、まずは現在の女子大学の置かれている状況や、その課題への対応策など、皆さんの率直な考えをお聞きしたいと思います。

女子大学の使命と社会的意義

堀　統計を見ると、学部生の男女比は、二十一世紀に入ってから構成比が大きく変化しています。男子の学生数が減少し続けている一方で、女子学生が急激に増えてきています。では、この女子学生は新たに、どのような大学に入学しているのかというと、残念ながら女子大学はその受け皿になり得ていません。むしろ共学の四年制大学が、従来、女子大学・短期大学に置かれることが多かった資格志向の家政・保健系を中心とした学部・学科を新たに設置し、そこへ女子学生が流れているという現象が見られます。

ただし、そうした流れも、もうすぐ沈静化するだろうと私は見ています。女子学生の増加もピークを迎え、そろそろ頭打ちになるからです。そうした中で、飽和状態を迎えている共学の四年制大学に対し、従来女子学生の教育を別学として高らかに掲げてきた私たち女子大学は、何か一味違う、女性の特性を生かせるものをもっと強く打ち出していけるかどうかが、重要なポイントになると思います。目下、本学でも、その具体的方策について頭を悩ませているところです。

いずれはそうした問題意識をもとに、女子大学はその個性をはっきりと明示する形で、今後のあり方を提示していかなければならないと考えています。

井原　根源的な問題意識として、本当に今、女子大学は絶滅危惧種のように衰退し、周囲から保護を求めなければならないような存在かどうかという点について考えてみる必要があると思います。その答えを見つけるためには、まず女子大学とはいかなる教育機関であるか、さらにはどのような責務があるのか、われわれが自分自身に問うてみる必要があると思います。

女子大学は女性だけを対象に教育を行っ

ているわけですから、特殊な形態であることは間違いありません。それを踏まえて考えてみると、女子大学には三つの責務があると私は考えています。すなわち、「人間教育」「女性教育」「社会人教育」を行う教育機関であるということです。人間としての資質、女性としての資質、そして、社会の構成員としてりっぱな人材に成長させること。この三つがバランスよく女子大学の教育の中で行われているかどうかが問われていると思います。

このような根源的な問いを前提として、各女子大学が多様性を発揮しながら、自らの伝統や文化、創立者の理念などに沿って特色を出し合えば、決して絶滅することはないし、社会的な意義も果たすことができるはずです。私の個人的な見立てですが、これができれば、少なくとも今後百年間は発展し続けるだろうと思っています。

リベラル・アーツを根本に据えた女子教育を展開

斎藤　井原理事長がおっしゃったように、人間として、女性として、社会人としての教育を適切に行うことは、女子大学において非常に大切なことだと思います。本学でも設立以来、専門知識のみならず、幅広い知識を身につけさせて人間性を涵養するリベラル・アーツを主軸に据えた教育を展開してきました。同時に、男女共学の大規模総合大学との違いとして、小規模であることの良さを生かし、目の行き届いた、一人ひとりを大切にする教育も進めてきました。設立当初に比べて学部や学科も増え、今や約六千五百名が学ぶ女子総合大学として発展しましたが、教育理念は、リベラル・アーツを重視した設立当時のまま変わることなく受け継がれています。

また、私自身、女子大学の管理運営に携わり、女性に特化して教育することのメリットを強く感じています。本学の学生を例に申し上げれば、彼女たちは決して自己主張は強くありませんが、芯は強いという特徴をもっています。また、コツコツとがんばる粘り強さももっています。冒頭で兼高先生は、女子大学を「なでしこジャパン」に例えられましたが、まさに女子サッカーの代表選手たちのように指導者の助言を得て、自らの力を飛躍的に伸ばしていく学生も少なくありません。女性にはそうした特質や共通項があるように思います。

教育のターゲットが明確に定まっているので、大学としても、ヒト・モノ・カネをはじめとしたリソースを、女性のためだけにすべて集中投下できる。それが女子大学の教育の良さの一つであり、だからこそ教育効果も上がるのだと思います。

実際、海外の例を見ても、有名な「セブン・シスターズ」（アメリカ東部にある名門女子大学七校の総称）の中には共学に衣替えした大学もあるとはいえ、本学のお手本になったマウント・ホリヨーク大学やスミス大学などでは、依然として有能な女性を輩出し続けています。男女平等の精神が日本以上に進んでいるアメリカでも、女子大学の存在意義は失われていないのです。日本の女子大学も運営方法によっては、まだまだ発展する可能性が高いと思います。

金子　女子大学とはいかなる教育機関であるかを考える際に、私は幼いころ商店街の中で育った経験から、一九七〇年代ごろ問題となった大型スーパーマーケットの進出と商店街にある小売店の存続とを照らし合わせて考えます。

食料品や日用品などを大量に仕入れ、安

価で多くの種類の品物を売る大型スーパーマーケットに対抗して、商店街の小売店は、品質の良さ、地域社会との密着の良さ、こまやかなサービスやお客さんとの会話によるコミュニケーションの高さなどを魅力に、顧客満足度を維持することで生き延びてきました。

私どものような小規模の女子大学も同じように、学生たちから「入学して良かった」「学生生活が楽しい」「知識が身についた」と思ってもらえる大学教育、運営を展開しなければならないと、思っています。そのうえで、「女子大学で良かった」という個性を発揮し続けることが必要になってきます。

男女平等が当たり前の世の中ですから、かつてのような教育を行っているだけでは、個性を出しづらい。一般的な大学教育を行っているようでは、女子教育の真価が問われても当然です。そのような社会からの懸念を自らはね返すだけの存在意義を示していかなければならないのです。

女子学生への教育に携わるようになって、私自身の大きな課題は、ライフステージにかかわらず働き続け、キャリアを積み上げていく女性を増やすことです。

女性の労働人口はかつてより増えてはいますが、現在でも、ある年齢に達すると結婚や出産を機に仕事を辞めてしまう。その後、子育てなどを終えると、また働くようになる。すると年齢別の労働力率はいわゆるM字型曲線をたどります。それが日本の女性労働の特徴であり、そこに課題があると私は考えています。社会のシステムなどとも関係する問題ですが、何とか、働き続けられる女性を一人でも多く育てていきたいですね。

歴史の中で培われたポリシーや創立者の考えを教育に生かす

兼高　女子大学が現在抱える状況や問題点について、簡潔にお話しいただきました。それでは次に、各大学の具体的な教育理念や方針について、さらには、その理念やポリシーが現在の大学教育の中でどのように生かされているのかについてご紹介いただきたいと思います。

井原　本学園創立者の下田歌子の言葉に「女性の清らかな徳性と豊かな情操を以て社会の弊を正せ」というものがあります。

社会のあらゆることを男性に任せていたら、戦争を始めたり、利益のとり合いに明け暮れたり、ろくな世の中にならない。女性は男性に比べて、情操も豊かだし、清らかな徳性をもっているのだから、女性のそうした特質を生かして、社会の弊害を正していくべきだという考えです。

また下田歌子はほかにも「揺籃を揺がすの手は、以て能く天下を動かす」とも述べています。お母さんが揺らすゆりかごの手が社会を動かす。すなわち母親（女性）こそが世の中をより良いものにしていくのだということを表しています。

女子大学が行う教育は、こうした女性創立者の考えを、胸を張って堂々と追求できるところに意義があります。

男女共学大学において、真正面からこのようなことを訴えたら、それこそ男子学生に気を悪くされてしまうでしょう。しかし、そうした気遣いの必要がなく、女性としての自立を思いっきり促すことができるのは、女子大学だからなのです。

斎藤　本学のルーツは、一八七六年に開学した「女子塾」にまでさかのぼることができます。創立者の新島襄は、社会で活動

堀　雅裕氏

している女性に対し「あなたたちは断然、世の改革者、いや、改良者となられよ」と激励したと伝えられています。さらに新島は、女子教育とは「社会の母の母」であること、つまり根源であるとも述べているほか、聖書を引きながら、「地の塩、世の光」となるような女性、すなわち世の中に必要とされる女性を育てることの大切さも語っています。本学においてもこうした創立者の精神は、現在の教育の中にしっかりと生かされています。

大学の方針をキャッチフレーズにして学生、卒業生、教職員等が思いを共有

斎藤　さらに近年では、こうした創立者の言葉や思いを振り返るだけではなく、その考えを広め、積極的に学生、卒業生、教職員、関係者と共有する取り組みも進めています。つい最近も、ブランディング戦略も兼ねて、本学の教育が目指すべき目標を一つのキャッチフレーズに表現し、大学の内外に提示する試みを行いました。

斎藤　宏充氏

その際に、私たちが参考にしたのが、来年のＮＨＫ大河ドラマの主人公に決まった新島襄の妻・八重の生き方でした。新島八重は非常に先進的な女性として知られていますが、人生そのものが本学の教育理念を体現している貴重な存在なのです。

八重は、江戸から明治へと移り変わる激動の中で、三つの時代を生きたと言われています。一つ目は、会津若松に生まれ育ち、幕末の戊辰戦争で会津藩の一員としてスペンサー銃を片手に新政府軍と戦った時代。二つ目は、兄を頼りに京都に出て、新島襄と結婚して同志社の教育に尽力した時代。そして三つ目は、新島襄の死後、看護師として日清・日露戦争に従軍した時代。日本のジャンヌ・ダルク、ハンサムウーマン、あるいはナイチンゲールと称されるゆえんです。

兼高　聖雄氏

このように八重は、周囲が大きく変化する中、信念を曲げずに、前を見つめながら、そのときどきを生きた女性でした。そうした八重の生き方、存在をイメージして、本学が考案したキャッチフレーズは「いつの

時代も、新しきを生きる。」(Always rising to a new challenge)。スローガンを高く掲げ、学生、教職員に、チャレンジの大切さを広めていこうと取り組んでいます。将来的にはこうしたキャッチフレーズを教育研究の中で具体化していきたい、女性の生き方をエンパワーするような科目や活動も新たにつくりたいと考えています。

教育理念は大学の屋台骨 時代に合わせた再定義も必要

金子　本学が設立当初から掲げているのは、「平和を目指す女性の大学」です。創立者である河井道の考えに基づいて、学園設立当初から他の学校では見られない「聖書」「国際」「園芸」を正課に取り入れるなど、ユニークな教育方針を掲げてきましたが、その根本にはつねに河井の平和に対する思いがあります。

井原 徹氏

河井は、国際問題について教鞭を執るときでも、平和学を基礎にしていました。例えば、世界における戦争や紛争が発生する因果を説き、それを回避するためには、このような国際関係を構築しなければならないと指導していたと伝えられています。

また河井は極めて信念の強い女性で、軍国主義の時代に、特別高等警察や憲兵から何度も出頭を求められ、取り調べを受けても、毎日の礼拝をやめることはありませんでした。不屈の精神の持ち主だったのです。

金子 博氏

そうした河井が生きた時代だからこそ、「平和」には切実な響きがありましたし、女性がそれを目指すことの大切さを誰もが理解できました。

ところが現在では、国内で戦争はないし、権力から学内の自由を制限されることもない。礼拝が禁止されるわけでもない。そうした中では、私たちの屋台骨であった「平和を目指す女性の大学」が意味するところが一般的にはわかりにくく、曖昧模糊となっている点も否めません。

今日の人の「平和」という言葉に対するイメージも変化しています。ですから、現代の女性が目指す平和について、理念に基づき具現化し、発信していかなければいけないところにいると感じています。

堀　本学の創立者跡見花蹊は「女性は国家の基(もとい)」であると述べています。事実、私なども内心は忸怩たるところがありますが、日本の男性は、女性に甘え、外国と比較して道徳のレベルが低いところがあります。そうした男性の負の部分を、伝統的に日本の女性が補ってきたことは否定できません。

本学としても戦前、実科系の女学校とは異なる系譜から、教養や道徳に光を当てた、

いわば古典的な教養教育を実践してきた歴史があります。

振り返ってみると、終戦のころまで本学では、寄宿舎での寮生活を基本に、上級生が下級生を指導する、先輩後輩（姉妹）関係を大切にした教育を行ってきましたし、高等女学校の適用をあえて昭和十八年まで受けなかった誇るべき歴史もあります。高等女学校になると、戦時対応として「修練」の時間が増え、伝統や文化を基にした特色ある教育を行う時間が十分に確保できなくなるとの懸念があったからです。

戦後においてもその精神は変わりませんでした。跡見花蹊は子どもに対する最も良質な教育は母親によるものであるとの考えを強くもっていましたが、その根幹の部分はいささかもぶれていません。

日本国憲法の前文の最後には「国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓ふ」とあります。国家の名誉にかけ、国際的な信頼を得ること、さらには自由と平等を追求するということを意味しているのでしょう。では、この国家とは何を指すのかと考えると、私は自由と平等が社会秩序の構成原理として機能する、そうした社会を包む国家にほかならないと考えています。

その意味では、私は本来なら男女の協学こそが教育の原理だと考えています。ところが、実際に共学の大学自体がそうしたことを踏まえて教育を展開しているのか、カリキュラムを組んでいるのかと考えると、いささか疑問に感じています。むしろ、女子大学のほうが、逆に男女共学、男女平等を意識している。そして、なぜ女子学生だけを対象にして教育しているのか、そこにはどういう意義があるのかということを徹底的に考えようとしていると思っています。男女共学の大学は、単なる共学という事実にただ乗りし、それだけで安堵してしまっているところがあるのかもしれませんね。

兼高　私もそのように思います。共学の大学がそうしたことを深く考えていないからこそ、女子大学が苦労しているという点も否めません。

井原　これは余談になりますが、突き詰めて考えると、女子大学の教育に深い意義があるとしたら、逆に男子大学の存在も考えてみるのもおもしろいのではないかと思います。男子高校はありますが、男子大学は存在しませんよね。女子大学とも、男女共学の大学とも違う、男子教育の意義も見えてくるのではないでしょうか。

受け継いできた教育理念をどのように教育に生かすべきか

兼高　各大学では、歴史に裏打ちされた教育理念を非常に大切にされていることがわかりました。では次に、そうした理念を、どのように日々の教育や講義に生かされているのかという点に話題を移したいと思います。

井原　私も、その点は非常に重要だと考えています。歴史に培われた教育理念なりポリシーが具体的にカリキュラムの中に落とし込まれているのか、普段の講義の中で生かされているのかという問題です。

専門的な学問分野であっても、そこに本学ならではの教育が色濃く出ているかどうか。そこを、私も理事長として重く見ています。例えば、本学が行う国文学の講義と早稲田大学が行う国文学の講義ではどこがどのように違うのか。そこを明確にすべきだと思うのです。このことは、学長をはじめとして教員とつねに話しています。もし、

同じような教科書を使い、同じような講義を行っているとしたら、私たちの存在意義がありませんからね。

もちろん、学問としての普遍性を無視して偏向しすぎてはいけませんが、教材選びから講義の進め方まで、本学ならではの個性はぜひとも出していきたい。日々の講義の中でも、女性の自立などを啓発できるようになれば、十分に共学大学との違いを出せると思います。

斎藤　本学では、平成二十四年度から五年間にわたる将来構想に向けた方針・方策を策定しました。その中でキーワードの一つとして掲げたのが「社会」です。同志社女子大学で過ごす時間は人生のうちの一時ですが、そこで得たものがこの先ずっと生きていくうえで糧となるような、社会との関わりを基本に据えた教育を展開していきたいと考えています。

例えば、近年注目されているキャリア教育を、リベラル・アーツ教育が目指す社会人としての基礎的・汎用的能力の育成にあると考えて、「論理的思考力」「分析力」などを「卒業までに身につけてもらいたい10の力」として定めました。インターンシップはもちろんのこと、ディスカッションやディベートなどの手法を重視して学部学科の授業科目にこれらの要素を取り入れたり、女性のキャリア形成に特化した全学共通のキャリア・デザイン科目を新設したりしています。

就職というと、三年次になってようやく意識し始める学生も少なくありませんが、それでは遅すぎます。こうした教育を展開することで、入学の時点から就職はもとより、広く社会との関わりを意識させていきたいと考えています。

堀　本学でも、在学の早い段階から卒業後を十分に意識させる教育を進めています。とりわけ、平成十四年に女子大学として初めて設置した社会科学系のマネジメント学部では、すべての学生に、二年次の段階で企業でのインターンシップを体験させています。学生たちも、社会と関わりをもつ貴重な機会になっています。

女性の自立を促すために ユニークな体験学習を展開

金子　本学では建学以来「女性の自立」を高く掲げてきました。これを学生たちに促すために独自の体験教育を実施しています。その一つが海外でのＦＳ（フィールドスタディ）です。

外国に留学する場合、アメリカやヨーロッパなどの先進国を選択するのが一般的ですが、本学はそれだけではなく、バングラディシュ、タイ、インドネシア、フィリピンなどへも行かせています。事前授業を修了したあとに、短期で一週間から十日間、長期で五カ月間、実際に現地で活動を行っています。大学としては、かなりリスキーな試みですが、参加した学生は精神的に大きく変わります。現地のＮＧＯ組織やＮＰＯ法人の協力を得て、紛争、復興、援助、人権、民主化、開発など「国の抱える課題」や、貧困、女性と子ども、マイノリティ、人身売買、ストリートチルドレンなど「社会的な課題」に、学生はリアルに対峙します。そして何でも食べられる、どこでも寝られる、誰とでも仲良くなれる。こんな女子学生に育ちます。

リスクがあることは確かですが、一人では絶対に行けないような所で、得がたい経験を積むからこそ大きな成果を生むのだと思います。戻ってくるころには、学生が見

違えるぐらいにたくましくなっていますから、効果は計り知れません。

ほかにも、「生活園芸」を必修科目として教育農場で学生に自分たちの畑をもたせ、二人一組で実際に畑仕事を体験させています。有機農業の畑ですから、ミミズや虫がいたり、ヘビやキジやタヌキもいます。入学当初は悲鳴を上げながら逃げ回っていますが、一年もたつと、農産物についている虫を手でつまむことなど容易にできるようになります。また都市化が進み、どのようにしてきゅうりができるのか、白菜はどのように栽培するのかなど、作物の栽培や収穫方法を知る若者は少なくなっていますが、その点、本学の学生はたくましいですよ。

東日本大震災以降、真の意味で「生きる力」が問われていると思います。有機農業を経験することにより、多様な生き物を認め、命のつながりとものの循環を大切にし、学生は自分と自然のつながりを確認する。そして、自分が生かされていること、命あるものとの共生を深く考えるのです。

兼高　非常にユニークな教育ですね。まさに恵泉女学園大学にしかできない、独自の教育だと思います。これにより社会的な評価も変わりましたか。

金子　高校生のご父母や進路指導の先生と情報交換したときに、「どういう資格が取得できるのですか」という質問を多く受けます。大学の優劣を測る尺度として、教育内容よりも、難関資格の取得率や就職率などがやはり注目されていますね。確かに重要なことですが、それがすべてだと私は思っていません。今後は、表面的な社会評価とは違う尺度で、大学の価値も測られることになっていくと思います。

質的転換が迫られている日本社会で、われわれも、明確な哲学をもって教育することが大切だと思います。縁あって本学で学んでいただく機会を得たのですから、学生たちにはより良い変化を与えたいと、強く願っています。

斎藤　学生に挑戦し体験させる機会を与えるのと同時に、安心かつ安全な居心地の良い勉学環境を提供することが重要です。新島襄の教えのとおり、一人ひとりを大切にし、丁寧できめ細かな支援・指導が必要になってきます。規模的にも、全学的に徹底して実現できることが女子大学の強みと感じています。

国際教養学科では、国際感覚を磨くため全員が英語圏の大学へ一年間留学するのですが、本学の教職員が留学先大学を訪問し、生活サポートまで行ったり、週に一度はスカイプを通じて各種相談などを行っています。女性は何と言っても口コミの力が強いので、学生に安心感を与え、自由に勉学に専念できる環境を整えていけば、結果的に大学に対する評価も高まるのです。

「知」の三分類による女子大学の教育論

井原　女子大学の教育についてさらに考えを深めると、非常に深遠な議論になっていきます。アリストテレスは「知」を三つの種類に分類しています。形式知（「エピステーメ」know why）、技能（「テクネ」know how）、実践知（「フロネシス」know what）です。これを女子教育にあてはめて考えてみたいと思います。

まず「形式知」です。つまり、何のためにわれわれ女子大学は、女子大生に教育を行うのかという問題です。これは、女性の自立を実現するためのものであると説明することができるでしょう。

次に「技能」ですが、これは目的達成のためにどのような方法で教育を行うのかという、ノウハウの部分です。これに関しては、女性だけを集めて女性の自立のために効果的なカリキュラムをつくる。そうした方法論を語ることができます。

難しいのは「実践知」です。人間として、女性として、社会人としてりっぱに成長させるための大学（女子大学）とは、どのような状態になっていればそう言えるのか。それを実現するには、カリキュラムのあり方、経営、教職員の資質、施設設備の有り様などを整合させた、トータルな見直しが必要になります。人間としてあるいは社会人としてということであれば、世界中の教育機関で行っていることですから、一般的に述べることはできるでしょう。しかし、女性としての教育ということになると、現状では女子大学だけの三つ目のミッションです。だからことが難しくなるのだと思います。その「実践知」の部分を女子大学がどのように方法論を含めて確立できるか。答えを見つけるためには、私たち経営サイドだけではなく、教学現場サイドも一体となって模索していく必要があるでしょう。

女子大学で学ぶからこそ自信がつく 共学大学の女子学生との違いとは

兼高　女子大学によるそうした教育が展開されることで、女子学生たちにはどのような効果が出ているのかという点は、非常に気になります。皆さんも実際に教育に携わられている中で、共学大学の女子学生との違いなどはお感じになりますか。

金子　本学のキャンパスの近くに、都から管理を依頼された自然竹林があります。その竹林整備の際に、教員の指導のもと、女子学生自らがのこぎりを用いて竹の間引き伐採を行います。また、文化祭などでテントの設営といった力が必要な仕事も、彼女たちは難なくやってしまいます。私たち男性教職員がうろうろしていようものなら、「危ないからどいてください」と言われてしまいますからね（笑）。とにかくたくましいです。

本学では、近隣の共学大学の学生と同じ場所のバス停を使います。入学して一年もたつと、不思議と「あの子はうちの学生だな」「あの子は共学大学に通う学生だな」と区別がつくのです。本学の学生には、何か内面から出る、共学に在籍する女子学生にはないものがあるような気がします。女性の発達段階において、一定期間同性だけの場で教育を受けることで、女性は自分の意思を強くし、より一層良い人生を送れるようになる気がするのです。

同時に、指導するわれわれも、そうした意義を実感できているのですから、自信と誇りをもって、女子学生への教育をしっかりやっていきたいと考えます。

斎藤　私も同感ですね。十八歳から二十二歳という、最も多感な時期の四年間、女性だけの環境で時を過ごすことのメリットは計り知れないほど大きなものがあります。濃密な時間の中で、特に友人たちと強い結束を固めることの意義はことのほか大きい。多くの学生が生涯の友をこの四年間で得ています。

一方で、学生同士はライバルでもあるので、お互いに切磋琢磨する機会が自然に生まれてきます。本学では、学生が勉学に励むための多彩な支援体制を設けているのですが、食物栄養科学科や医療薬学科では国家試験対策室を設置して、正課とリンクさせてサポートしています。学生は国家試験

に合格しようと必死になり、自主的に勉学しようという意欲が出てきます。それこそ、友だちと励まし合いながら、異性を気にせず、熱心に打ち込みます。そうした時間は、学生同士の絆となり、財産となり、必ずや豊かな人生につながっていくことでしょう。そうであるからこそ、教職員の役割が重要で、甘やかすのではなくしっかりサポートしなければならないと強く思っています。このようなことも女子大学の学生の雰囲気を形成しているのかもしれません。

男子学生に依存できない環境がリーダーシップを育む

井原　やはり自立についての意識は、女子大学の学生と共学の大学の女子学生とでは、歴然とした違いが出てくるでしょう。

共学の大学に通う女子学生は、やりたくないこと、面倒な作業を男子学生に上手に引き受けさせてしまう傾向もあるように聞いています。実際、私が早稲田大学で職員をしていた際、ゼミ長やサークルの幹事なども、やはり男子学生が担当していました。しかし、女子大学では押しつける男性がいない。何でも自分たちで担わなければいけない環境ですから、自然とリーダーシップを身につけることもできるのだと思います。

本学の系列の高校を卒業して共学の大学に進学した女子学生が、周囲の女子学生を見て「何て主体性がないのだろう」と憤慨していると聞きました。何でも男子学生にやらせてしまい、まるで自立していないと、その女性には見えるらしいのです。

堀　本学の学生について言えば、われわれの力不足と認識すべきでしょうが、芯があるのに押しの弱い点が気になります。女性の自立を私たちも標榜していますが、学生たちを見ていると、さらにもう一歩、二歩、自分を信じて前に踏み出すべきではないかとの印象をもっています。社会に出れば、押しの強さ、自信に満ちあふれた対応が必要になりますから、何とか身につけさせてあげたいと思っています。

そのためには、普段の教育から社会とのつながりを意識させるなどをして、社会に向けて確かな目をもつ視野の広い学生を私たちが責任をもって育てていかなければいけないと考えています。就職問題に関しても、担当部署や組織だけに任せるのではなく、われわれ教職員も積極的に企業と交流するなど、従来の枠にとらわれないさまざまな努力も必要だと考えています。

兼高　押しの弱さの原因はどういうところにあると思いますか。

堀　これは決して良し悪しの問題ではありませんが、本学の伝統が少なからず影響しているのかもしれません。本学は必ずしも「良妻賢母」の旗だけを振ってきたわけではありませんが、明治八年の創立時から日本の伝統的な文化を積極的に教材に活用してきましたし、そうした和の教養教育の流れは今も残っています。そのような経緯から、やはり「おしとやかな女性」というのがにじみ出てしまうのかもしれませんね。

一方では、その良さを守りながら、時代のニーズにしっかり応える形で新たな取り組みも大胆に考えていきたいと思います。

女子大学における制度変遷と価値観の変化に関する総括が必要

井原　実は私自身も最近知って驚いたのですが、女子大学が制度として認められたのは戦後になってからのことです。それまで高等女学校や女子専門学校はありましたが、女子大学は存在していなかった。それが昭和二十三年、戦後の民主化の流れで設置認可されることになりました。

戦後間もなくに女子教育に大きなパラダイムシフトが起こったわけです。しかし、制度は変革されたけれど、女子大学における教育とはどうあるべきかが国民的レベルで吟味されないまま、ここまで来てしまったように思います。「良妻賢母」、本学創立者の下田歌子に言わせれば「賢母良妻」ですが、本学もこれを大切にして教育を行ってきた歴史があります。そうした価値観は、当時は大切な価値観とされていましたが、今では「時代遅れ」と言われるようになっています。

でも、実際のところ、そんなに単純に割り切れる問題だとは思えません。少なくとも私は、「良妻」はともかく、「賢母」教育を否定していいのかという思いを強くもっています。

女子大学の中には時代に応じて、新しく共学大学へと生まれ変わる大学もあります。もちろん、それを批判する気持ちは全くありませんが、女性の地位向上や自立自営を建学の精神としている以上、本学では共学化はできないと思っています。

実は、そのこととも深く関わるのが、大学と系列の中学・高校との連携です。本学の場合、かつては系列高校の卒業生の八割が、本学あるいは併設の短期大学に進学していました。しかし、現在では以前に比べてその内部進学率が低下し、系列外に進学する学生が増えています。

この原因の一つは、やはり社会の価値観の変化も関係しているでしょう。手前味噌ですが、かつての実践女子大学は一定の高評価がありました。その背景には、やはり良妻賢母が尊ばれた風潮があったのだと思います。しかしその価値観が崩れ、今や志望校選択の条件は、偏差値やブランドになっていると思います。

系列の中学・高校で徹底的に礼節教育を学んだ生徒が本学に多数進学してくれると、実践女子大学ならではの「色」が明確になり、伝統継承者の核を形成できるのです。そのため、何とか高校との連携を図っていきたいと考えていますが、非常に頭の痛い問題ですね。

金子　私もその点には頭を悩ませています。事実、系列高校の進路指導の教員と大激論を交わしたことがあるのですが、その際の教員の発言は非常に説得力がありました。「六年間も女子だけの生活をしてきた生徒に対して、さらに四年間も同じ環境で過ごせと言っても無理だ」。さらに、「親もせっかくだから大学は共学のところに行かせたいと考えるのが普通の感覚だ」とも力説しました。

もっともだと思い、考えを引っ込めざるを得なかった経緯があります。

以前は、良家の子女用の教養型大学としてストレート進学が好まれた時代もありましたが、系列校の問題は難しいですね。

兼高　女性は男性に比べ、身近な成功者の行動をお手本にしたり、影響を受けやす

かったりします。

先ほど、同志社の創設者新島襄の妻であり、同志社女子大学にとっては前身である女子塾の開校、女学校の教育にも尽力した新島八重についてお話がありました。その生き方を参考にするために、大学全体のキャッチフレーズまでおつくりになったということですが、身近なロールモデルは、女子学生への啓発の意味でも非常に大切なのではないかと思います。皆さんはこの点についてどのように考えられますか。

身近なお手本「ロールモデル」として社会で活躍する卒業生の存在は重要

金子　これは、女子大学において大変に重要な視点だと思います。この大学で学んだらあの先輩のようになれるという具体的なお手本を見せられれば、学生もやる気になりますよ。

しかし、残念ながら本学が足りないのも、このロールモデルです。まだ大学ができてから二十年余りしか経過していないので、歴史が浅い。先日、初めて国際連合職員が誕生したと聞いて、「二十年やってきたのが、やっと実になったのかな」と私自身も大いに喜びましたが、在学生にとって身近なロールモデルとなる卒業生もまだまだ少ないのが現状です。民間企業でもやっと課長、部長が出てきたぐらいかなという段階です。皆さんの大学には知名度の高い卒業生も大勢いらっしゃるでしょう。本学ではまだこれからという状態です。

斎藤　私も女子大学において、ロールモデルとしての卒業生の存在は非常に重要だと思っています。ただ、そうしたロールモデルにおいて、知名度や肩書きなどの要素はそれほど大きな意味をもたないのではないかとの思いをもっています。要は、いかに卒業生が自分のやりたいことができているか、生き生きと暮らしているかという点を、在学生に見せてあげられるかどうかにかかっているからです。

厳密に言えば、年齢もあまり学生と離れすぎてはいけない。大学生に対しては三十代前後、高校生には二十五歳前後のロールモデルが一番効果があると思います。つまり、ちょっと背伸びをして努力をすれば到達できるぐらいの、身近なロールモデルのほうが、学生たちも親近感がわくのです。本学では先日、社会で活躍する卒業生二十名を取材して、『パーソンズ』という冊子にまとめましたが、その中心は三十歳代で固めました。主婦の女性も取り上げていますし、学生時代に目指したことを転職を重ねながら実現した女性など、さまざまなフィールドで生き生きと暮らす女性を掲載したのですが、大好評でした。

堀　同窓会組織の課題かもしれませんが、卒業生が社会の中でどのように活躍しているのか、仕事をしているのかという情報を大学側が十分に把握していないことも問題です。しかし実際は、情報をたどって聞いてみると、社会のあちこちで卒業生は結構活躍しているんですよ。実は、学内にいる教職員が知らないだけということもあるのだと思います。

私は、女子大学とは、本来、学生の一生涯をサポートする教育機関だと考えています。ですから、学生の人生にどこまで伴走できるのか、その女子大学ならではの仕組みをつくっていくことが大切です。そのためにも、まずは卒業生の情報をしっかりカバーし、把握することから始めることが必要だと思います。

金子　確かに、本学でも卒業生の情報収

集は十分ではありません。来年は設立から二十五周年を迎えますので、全卒業生に声をかけて、大同窓会を開催しようと企画しています。これを機に、卒業生のネットワークを構築したいですね。同時に、それをもとに、卒業生同士が気軽に集まったり、異業種交流をしたりする機会を数多くつくっていきたいと思います。

斎藤　本学でも法人レベルでの卒業生組織はあるのですが、十年前、新たに本学のみの組織を構築しました。定期的に広報誌を配付するほか、会員を対象としたクレジットカードなどもつくったところ、多くの卒業生に会員になってもらいました。事務局は本学に設けましたが、運営なども含めて卒業生が積極的に担っています。

今では、ホームカミングデーなどのイベントを大学と共催したり、全国各地に本学の教員が出向いて講演をしたりして、卒業生と大学、さらには在学生をつなげる組織として機能しています。卒業生が在学生にアフタヌーンティーなどのマナー講習会を開くなど、在学生の貴重な教育の機会にもなっています。

井原　本学でも実践コミュニティ「アラムナイネットワーク」が動いています。学生にとって身近なロールモデルである卒業生の協力を得ながら、在学生に働くことのイメージを拡大させたり、キャリア形成に向けてのアドバイスを行うプロジェクトです。これには、ウェブ上のコミュニケーションも併用されています。卒業生に対しても、ニーズに対応した情報提供、講演会の開催などを行い、生涯にわたるキャリア支援を行っています。

さらに、学生にとっては学内組織も身近な社会の一つですから、いかに大学内で女性が生き生きと働いているか、活躍しているかということを示すことも大切だと思っています。その観点から、女性のパワーアップを目指した担当理事を新たに一人配置しました。女子大学における女性職員の活用は重要な視点の一つです。

完全に浸透していない男女共同参画 そこに女子大学の役割がある

堀　大学職員の採用試験の結果などを見ると、明らかに女性のほうがよくできます。おそらく、女子大学の職員を希望するということは、社会的に見て中堅の安定している企業に就職するようなイメージでしょう。このカテゴリーには、非常にレベルの高い女性がアクセスしてきます。その背景には、男女共同参画社会が浸透しているとは言っても、やはり大企業で女性が十分に活躍できない事情もあるのではないでしょうか。そうした現状を、若い女性たちも敏感に察知している。そこで十分に活躍できる組織として、女子大学を自らの職場として選択するのだと見ています。

井原　私もそうした面は否定できないと思います。確かに表面的には、男女共同参画が進み、平等が推進されたように見えますが、現実的には完全に定着しているわけ

ではないと思います。むしろ、男女共同参画や雇用機会均等などが社会の隅々にまで行き渡っていないからこそ、わざわざ国が法律をつくって支援せざるを得ないのではないでしょうか。

そう考えると、女子大学は、女性の地位の向上などに向けてやるべき課題はまだあるはずだし、社会的にも果たすべき役割があると思います。

兼高　これまで女子大学の現状を踏まえて、さまざまな活性化策が出されましたが、最後に今後の女子大学の教育のあり方について、ご提言をいただければと思います。

エビデンスに基づいた女子教育

井原　これからは、よりエビデンスに基づいた女子教育の方法論を積極的に模索すべきではないでしょうか。

「大学行政管理学会」という、私も会長を務めた職員中心の学会組織では、三年ほど前に「女子大学研究会」が立ち上がり、活発に活動をしています。この中で「男女別学の教育効果に関する研究」というものが発表されたのですが、この内容が非常に興味深いものです。数年前に新聞でも報じられたのでご存じの方もいるでしょうが、アメリカのフロリダにある公立小学校の四年生の学習に関するデータで、それによると、それまで共学だったクラスを男女別学にしたところ、学習の理解度、学力テストの点数などが飛躍的に上がったということです。

イギリスのケンブリッジ大学の研究調査でも、小学校、中学校、高校、大学とそれぞれのステージで、やはり別学にしたほうが成績が向上したことが紹介されています。

よく私たちは、女子大学のメリットは何かと問われた場合、学位論文の取得率が高いといった形式論ばかり話していたのですが、これからはこうした明確な教育現場のデータをもとに、より具体的にその効果なり可能性について考えるべきではないかと思います。ただし、現在のところはこうした調査研究は日本で行われていない。そこが大きな課題でしょうね。

斎藤　私も同感です。欧米のデータを日本に紹介することも大切ですが、これからは私たちも女性の育成に焦点を当てて、各種調査研究を行うべきだと思います。実際に、本学ではそれに向けて女性の研究組織も立ち上げる予定です。そうした研究を行うセンターを設置している女子大学もありますから、参考にしたいと思います。

井原　女子大学を巡る最近の動向で特に目を引くのが、京都女子大学の法学部の新設です。私のような経営の立場から言わせてもらえば、学生を巻き込むために、どういう学問の品ぞろえをするのかという点は、何にもまして重要です。京都女子大学はそこに大きな挑戦をしました。従来、男子学生の履修が多い傾向がある法学部をあえて設けたのです。ここで四年間学んだ女子学生がどのように社会へ進出するのか、大いに期待しています。心からエールを送りたいですね。

斎藤　新しく学部をつくるのは大変なことです。本学でも現代社会学部の中に法律コースを設けていますが、学部を新設するには教員もスタッフもそろえなければなりません。そこにあえて踏み込んだということは、まさに挑戦以外の何ものでもないと思います。

井原　京都女子大学が挑戦している法学部もそうですが、従来、女子大学に少なか

ったのが、いわゆる「先生」と言われる職業養成の学部です。例えば政治家。政治学部も政治学科も女子大学にはありません。医師だって、東京女子医科大学はあるにしても、医学部を設置している大学は共学が断然多い。

学校の教師については多くの女子大学もカバーしていますが、それでも共学大学のほうが数は圧倒しています。

今後、「先生」と呼ばれる職業を育成する学問を、女子大学がどう品ぞろえして構成していくか。その意味でも、京都女子大学の法学部が試金石になるでしょう。成功したら、ほかの女子大学も追随するでしょうからね。だからこそ、私は京都女子大学の試みに期待していますし、心の底からエールを送っているのです。

堀　女子学生の増加が飽和状態を迎えることは最初に述べましたが、まさに女子の進学がそういう状況に達したからこそ登場してきたものと評価し注目しています。

女子大学出身の弁護士、政治家、医師等第一線で私立する女性が活躍する社会ができれば、それこそ男女別学の教育効果が実証される機会になるかもしれませんね。

斎藤　男女共同参画がまだ不十分だとしても、労働力人口の減少など社会はどんどん変化し、女性の労働力が必要となってきています。かつては男性中心と言われた職場にも、女性が急速に進出しています。おそらくこの流れは止まらないでしょう。こうした時代ですから、私たちも、新しい分野にもチャレンジする女性をどんどん社会に送り出していきたいですね。そうすれば、現在低い位置にランクされている日本のジェンダー・エンパワーメント指数（GEM）の順位も改善されるでしょう。

女性の社会進出がさらに促進すると第二のパラダイムシフトが起きる

井原　すでに申し上げたように、女子大学は戦後になって初めて、大学として認められました。最初のパラダイムシフトです。

そして今、女性の社会進出が当然のように進み、かつて男性が主流だと言われた職種にもどんどん入ってきている。しかし、あまり目には見えていませんが、潜在的には社会のあちこちでかなりの摩擦が起きていると思います。端的に言えば、カオス的な状態と言ってもいいでしょう。

このような流れがしばらく続き、やがて落ち着いてきたときに、第二のパラダイムシフトが起きるのではないかと思います。混迷から抜け出し、価値観の新たな創造に向かうそのときこそ、日本は新たな民主的国家として、秩序ある社会を再構築できるのではないかと思っています。

現在はその前段階。夜明け前ですから、混乱するのもある意味当然のことなのです。しかしやがてはそういう社会が来ると信じています。その流れを予想すればするほど、ますます女子大学は必要不可欠な存在になるはずです。極めて楽しみな時代ですね。

兼高　今、女子大学の人気は低下傾向にあることは確かです。解決しなければならない課題も数多くあります。本日の座談会では、そうした課題解決のための道筋について、さまざまなご意見が出されました。また、あらためて女子大学の意義、良さを見つめ直す機会にもなりました。

中でも印象的だったのは、新学部の設置も含めて、意欲的に新しく挑戦する女子大学が出ていること。これからの女子大学の発展がますます期待されます。

本日はありがとうございました。